# 第4章

# 骨髄バンクへの協力

## ●ｈｉｄｅのドナー登録&記者会見

１９９６年８月、和子さんはｈｉｄｅの弟・裕士（ひろし）さんからの電話を受けた。仮住まいとなっている伊勢原のワンルームマンションにかかってきたのだ。

「あさって、ドナー登録してきます」

ひどくあっさりした言い方だったが、和子さんは複雑な感情に包まれた。

真由子さんの移植に当たっては、姉の仁美さんがドナーとなったが、それはＣＤ34陽性細胞移植という、まだ実験段階の治療しか選択肢がなかったからだ。骨髄バンクにドナーがいれば、ＨＬＡが完全に適合した人からの骨髄移植を受けていたにちがいない。

「適合ドナーを待つ身って、こんなにもつらいんだね」

政人さんとも、こんな話を何度してきたかしれない。和歌山骨髄献血の和を広げる会に最初からかかわっていたから、同じ境遇の患者家族の気持ちは痛いほどわかる。

だからといって、ｈｉｄｅにドナー登録をしてくれとはとても言えるものではなかった。それは、単に相手が有名人だからということではなく、患者家族にとっては、ドナーがあらわれないつらさとは裏腹に、親しい人に言い出すことに気後れしてしまう。全身麻酔など、それなりのリスクがあるからだ。

それでも、少し前に事務所のスタッフと雑談した折、スタッフのひとりがドナー登録の方法を話題にしたことがある。

「じゃあ、今度来るときに骨髄移植推進財団が出している『チャンス』という案内パンフレットを持ってきますから、それを読んでください」

むろんそのときは、スタッフがドナー登録を考えてくれているのかな、という程度の軽い受け止め方しかしていなかった。

「あ、ｈｉｄｅさん登録してくれるんだ」

電話を受けても、まだ実感はわいてこなかった。和子さんなりに感動を広げていくのは、ｈｉｄｅの登録がワイドショーで放映されてからになる。

当日の８月13日、東京・渋谷区の日本赤十字社中央骨髄データセンターには、久しぶりにマスコミが殺到した。

もちろん、ｈｉｄｅの骨髄バンクへのドナー登録を取材するためだ。ビッグスターの登録、しかもその背景には難病の貴志真由子さんとの交流がある。とりわけテレビにはぴったりの話題だったのである。

午後１時過ぎ、事務所のスタッフらとあらわれたｈｉｄｅは、好きな黄色のシャツに茶色のズボン姿だった。サングラスをかけ、薄いピンク系の帽子の下から、ピンクに染めた髪の一部がのぞいていた。

いったん所長室に案内されたｈｉｄｅとスタッフは、狭い小部屋に通された。そこで、ドナー登

録のための説明と採血がおこなわれるのだ。
ところが、取材陣が一緒に入ろうとしたら、入室を拒否されてしまった。
「どうして？」
「何がいけないの？」
取材陣は初め、ｈｉｄｅが嫌がっているのかと思った。それなら仕方ないかとあきらめかけたが、スタッフに聞くとそんなことはない、という。
ならば、と日赤職員との交渉が始まったのだが、ラチがあかない。日赤の理由はこうだ。
「登録者のプライバシー保護のためです」
92年6月にタレントのケント・デリカットさんと歌手の刀根万里子（当時は麻理子）さんが、同じ場所でそろってドナー登録をしたときには、一部始終を取材できた。
過去の例などを挙げては、なんとか登録現場に入りたいと考えた取材陣も、日赤の堅い対応に大きな不満を抱えながら、結局、引き下がった。
その代わり、新たな動きが始まった。
「私も登録するわ」
そう言い残して、テレビの女性リポーターが小部屋に消えていってから、ならばと4人の記者がつづいた。部屋の中には、ｈｉｄｅのほかに事務所のスタッフ3人が登録のためにいたから、ｈｉｄｅを除くと8人が新たに登録することになったのだ。ただし、女性リポーターは血液の比重が軽



くて、はねられてしまった。
待つこと数十分、ｈｉｄｅとスタッフらが小部屋を出て、記者会見場に姿をあらわした。ｈｉｄｅの左に全国骨髄バンク推進連絡協議会の海部幸世（かいふさちよ）会長、右にライオンズ日本財団の加藤正見理事長が座り、取材陣の質問に答えた。
ｈｉｄｅが急逝することがなければ、やがて実際に骨髄液を提供することになったかもしれず、そのときは改めて記者会見が開かれたはずだ。それはもうかなわないことになったため、骨髄バンクとのかかわりを公式な形で外部に述べたのは、この場が最初で最後になってしまった。
そこで、20分ほどだった記者会見のやりとりをつぶさに再現しよう。話し言葉をそのまま活字にすると、若干の違和感が残るが、Ｑがマスコミの質問、Ａがｈｉｄｅの回答である。

Ｑ　今すべてを終えられて感想をお聞かせください。
Ａ　ただ単に、注射が怖かったです。
Ｑ　怖かったですか。これまでに注射の経験とかは？
Ａ　いや、ありますけど。久しぶりですね。
Ｑ　きょうのドナー登録について、真由子ちゃんには何かおっしゃったんでしょうか。
Ａ　ええと、2日ぐらい前に話したときには別に何も言ってなかったです。特に「登録するよ」とか別に何も言ってないです。そのときは普通の話でした。

Q　きょうのことは、真由子ちゃんには報告しようとは思っていらっしゃるんですか。
A　そう、事後報告の形ですけど。
Q　どんなふうに報告なさいますか。
A　いや、「登録したよ」って。
Q　真由子ちゃんに会ったことが、今回ドナー登録をする直接のきっかけだったと思うんですが……。
A　はい。
Q　何かこんな出来事が、登録しようと意志を固めたということはありますか。
A　そうですね。別にふだんから骨髄バンクのこと考えていたわけでもないし、そういう子がいるってことはテレビでの話ぐらいにしか思ってなかったから、自分たちの曲を聴いているような子は、身近でなんかこう単純にSOSを送ってて、それでボクが自分が何ができるかって思っちゃいないです。だけどなんか、会うことで手を握ったりすることできるでしょ。そのときに何か、自分が考えたってことが、その子の手を握りに行くとか、そういう簡単なことから、できたらいいなあって思って。だからあんまり深く考えてるんじゃなくて、単純に行動したかったんです。それだけです。
Q　真由子ちゃんが3月に骨髄移植を受けられて、そのあと真由子ちゃんの病状がちょっと悪くなってしまったときがあって、hideさんが駆けつけられたということなんですが、どういったお話をされて励まされたんですか。
A　そのときは、もう無菌室だったんで、直接というより、ガラス越しだったんですけど、顔を見



たかったという、顔を見せたかったという、あんまり考える余裕がなくて、もう行ってたから。
Q　真由子ちゃんはhideさんがいらっしゃったことを、わかったんでしょうか。
A　わかってました。なんか、元気のふりをしてたんです。
Q　お電話なんかも何度も何度も病室にされてるというふうにうかがったんですが、どういったお話をされてるんですか。
A　いや、割と普通の話です。もう普通に、友達と話すような。ただ、なんか、しゃべるのがね、つらそうなときとかがあって、きょうはどう？　何食べたの？　ボクはレコーディングで大変だよって。そういう普通の話をするぐらいです。
Q　真由ちゃんと会ってから半年以上たつと思うんですが、hideさんからご覧になって、真由ちゃんの魅力的なところ、あるいは惹かれるところというのはどういうところでしょうか。
A　うーん。やっぱり、ちっちゃい、あんなちっちゃい体でね、そんなおっきな病気と闘っているっていうとこ、ボクは何をしてあげたわけじゃないけど、ボクはただ横で頑張ろうよ、頑張ろうよって言ってるだけですけどね。なんか、そういう闘ってる姿にやっぱり惹かれますよね。
Q　YOSHIKIさんですとかほかのメンバーの方々には、今回のことはお話しされたんですか。
A　いや、全然話してないですけど。ハイ。
Q　なんとおっしゃいますかねえ。
A　いや、なんて言うかなあ。まだ考えてないですけど、「こういうことがありました」と言います

けど。

Q　去年の暮れに真由子ちゃんがX　JAPANのコンサートに行かれたと思いますが、そのときに手紙の交換をしましょうというようなお話がありましたね。その後、何か真由子ちゃんから手紙がきたり……。

A　手紙は、ハイ、そのあとLAに行ってて手紙は何通かもらったんですけど。ボクは筆無精なもんですから、電話で済ませたりしたんですけど、何通かは文通しています。

Q　お礼の手紙という形ですか。

A　ハイ。というか、もう友達同士の手紙みたいなものです。きょう何があったとか。

Q　今後、音楽活動を通じて、ファンの方などを含めてメッセージを伝えていくと思うんですけど、特にコンサートなどは予定されているんですか。

A　コンサートは9月から始めますけど、ただこのことをボクの口からあんまりうまく言うのは下手なんで、変なふうになっちゃうのはいやなんで、ボクは単純に今回登録っていうことで、行動を考えてもらえるんだったら、きっかけとしてそうなっていくんならいいなというふうに思っているんで。だからあんまり言葉で、ちょっとね。

Q　チャリティーコンサートのような形になるんですか。

A　そうですね。チャリティーコンサートで協力できる形で、ハイ。

Q　最後に、真由子ちゃんたちのように病院で頑張っている子どもたちに、メッセージをひとこと



いただけますか。

A　頑張ってください、ということぐらいしか言えないですね。頑張ってください。何か協力できることとかあれば、ちっちゃなことしかできないかもしれないけど、ハイ。

このあと、検査用に採血されたところに絆創膏（ばんそうこう）を貼り付けた左腕を差しだし、右手にドナーカードを示したhideの姿が集中的に写真撮影された。このときのワンショットが、のちにボランティアの募金活動用チラシに活用されることになる。本書の帯に使われた写真も、同じものである。

一問一答のやりとりをメモしながら、ひとりの記者が決意を固めていた。

「hideさんに、サインをお願いしよう。超有名人ではあるけど、これほど難病患者のことを考えているんだから、きっと受けてくれるにちがいない」

発言とは裏腹な行動をとる芸能人は少なくない。場合によってはことわられるかもしれないけれど、ここは当たって砕けろとばかりに、会見が終わってすぐ取材ノートを差し出したのは、毎日新聞社会部の小野博宣さんだった。

小野さんは、7月から始まった「生きる――小児がんの子どもたちとともに」の連載記事を担当していた。小児ガンの多くは、骨髄移植の対象となる白血病だ。hideの登録も翌日の朝刊用に記事を書くつもりだが、できればサインがあったほうが扱いも大きくなる。そんな目論見も、実はあった。

「いいですよ」
いとも簡単に、ｈｉｄｅは小野さんが差し出した取材ノートの裏表紙にサインを書いた。翌日の朝刊に写真とサインをあしらって掲載されたが、東京本社版では5段だったのに対し、大阪本社版では社会面のトップ記事だった。

## ●ライオンズ日本財団＆骨髄バンク推進連絡協議会

ドナー登録後の記者会見で、ｈｉｄｅへの最後の要請（子どもたちへのメッセージ）の前に、実はライオンズ日本財団の加藤正見理事長が意味深長な発言をした。
ｈｉｄｅは最初、新宿の献血ルームへ行って、ひっそり登録しようと考えていた。それを止めたのは加藤理事長だ。
「日本一の乗降客のある新宿を歩いてみなさい。めざといファンが殺到して、かえって周りを混乱させてしまう心配があるよ」
そこで、一般の登録を受け付けていない中央データセンターに連絡をとって、静かな雰囲気の中で登録を済ませることにしたのである。ｈｉｄｅの内面を加藤理事長が代弁した。
「この人は、登録は他人様に言うことじゃないって考えを持っていますよ。自分がまずやれば、みんな必ずついてくるだろうともね。それが喜びなんです。だから、もちろん報酬や変な対価を求めない。自分がやって感動を巻き起こすという自然体なんだな。きょうもマスコミにお目にかかることは、決して本人が望んだわけじゃないんです」
マスコミに知らせることを提案したのは、加藤理事長だった。骨髄バンクへのドナー登録者の伸びが頭打ちになっていたのと、のちに述べるｈｉｄｅのソロツアーで募金活動ができることになっていたからだ。
「自己顕示欲が強くて、特になんらかのきっかけで売り出したいということではなく、ひとりで黙ってやりたいというのが、ｈｉｄｅさんの本当の願いなんです」
しかし、ｈｉｄｅの気持ちを逆なでするような記事が、しばらくして週刊誌に出た。加藤理事長はそれを見越したわけではなかったが、記者会見の場にいれば書けるはずのない中傷めいた内容だったのである。
「ｈｉｄｅのドナー登録は、売名行為だ」
これを知ったあとのｈｉｄｅは、ひどく酒が荒れたという。不本意な記事というより、悪意に満ちた中傷ととらえたのだろう。それ以上に、真由子さんとの交流が傷つけられたと思ったのかもしれない。ｈｉｄｅほどのアーティストが、今さらドナー登録で売名する必要などまるでないことを、わかってもらえない苛立ちもあったにちがいない。
加藤理事長を軸にした「旧知の間柄」の3人の大人が、その後の募金活動につながる伏線をつく

りあげたことは、一般にはあまり知られていない。

加藤理事長の古くからの知人に、ＸＪＡＰＡＮやＧＬＡＹを擁するヘッドワックスオーガナイゼーションの代表と、全国骨髄バンク推進連絡協議会の海部幸世会長が含まれていた。

ｈｉｄｅが真由子さんと対面する少し前から、加藤理事長はｈｉｄｅの会社の代表者と一緒に食事をする機会を利用しては骨髄バンクへの協力を呼びかけていた。それは、95年秋の園遊会で海部会長と久しぶりに語り合うことがあったからだ。

「私ね、主人が総理を辞めてから、社会のために何ができるかを考えたの。外国では大統領や総理のご夫人があらゆる機会をとらえて、ボランティア活動をなさってるでしょ。そこで、私がかかわり始めたのが骨髄バンクなの」

海部会長は夫の俊樹氏が現職の首相であったころ、ヒューストン・サミット（90年7月）で当時のブッシュ大統領夫人のバーバラさんから声をかけられて戸惑ってしまった。

「日本の骨髄バンクはどのようになっていますか？」

ブッシュ夫妻は実業家だったころ、子どもを白血病で亡くしていた。バーバラさんはその後、全米骨髄バンクの啓発ビデオに登場することになり、全米骨髄バンクへの急激なドナー登録者増に貢献するといったように、骨髄移植や骨髄バンクに深い関心を持っていたのだ。

ところが、海部会長は日本の状況を全く知らなかった。知らないで済ませるわけにはいかないと思った海部会長は、俊樹氏が首相を辞めて自身にも時間的な余裕が生まれたのを機に、関係者に会



うなどして知識を深めていったが、ついにボランティア団体の全国骨髄バンク推進連絡協議会の会長に就任した（92年5月）のである。

骨髄バンクのボランティア団体は全国各地にあるが、それらが集まって現行の連合組織を立ち上げたのは90年6月だった。当初は「公的骨髄バンク」の設立運動を展開し、バンクが出来てからはシンポジウム開催などを通じてドナー登録への訴えや、骨髄バンクへの様々な提案をつづけている。

そのほかの目立った活動として、患者向け電話相談（白血病フリーダイヤル）や、経済的事情で骨髄移植を受けられない患者のための給付基金の運営、最新医療事情などを盛り込んだ情報誌発行などがある。加盟は34団体（98年8月現在）を数え、関西と九州は各府県の団体が支部単位で参加しているため、未加盟の地域は山梨、岡山、広島、徳島、香川の5県だけとなった。

園遊会で、海部会長にボランティア活動を聞かされた加藤理事長は、のどに突き刺さった魚の骨のようなものをずっと引きずっていた。

「ボランティア団体は、活動資金をすべて寄付で賄っているんだけど、なかなか集まらないのよ」

そのうちｈｉｄｅが登録し、秋にソロツアーが始まると聞いた加藤理事長の頭の中で、見事に結びついたアイデアがあった。

それが、コンサート会場の外で募金活動できないか、というものだったのだ。事務所の代表も賛成してくれ、寄付者に渡すバッジもｈｉｄｅがデザインして事務所が用意することになった。

## ●驚きの連続だった募金活動

ｈｉｄｅのソロツアーは、9月4日から10月20日まで全国14会場で20回おこなわれることが決まっていた。すべて午後6時半の開演で、それまでの時間を利用して会場外での募金活動を進めることにしたのである。

ライオンズ日本財団は募金箱とグリーンのスタッフジャンパーを作成した。全国協議会は特製バッジのほかに配るチラシのアイデアを考えた。チラシは、中央にｈｉｄｅがドナー登録したときの写真をあしらい、こんな文章をちりばめた。

〈ｈｉｄｅもやったぞ　骨髄バンクに登録しよう〉
〈君の健康が患者さんの命を救えるかもしれない〉
〈●骨髄バンクに登録できる方→20歳から50歳までの健康な人〉
〈※登録は採血だけで済みます。※骨をけずったりはしません〉
そして、登録の問い合わせ用に骨髄移植推進財団のフリーダイヤルを刷り込んだ。
〈０１２０－３７７－４６５〉

募金のための人員は、ライオンズ日本財団と全国協議会からそれぞれボランティアを出すことにしたが、10個用意された募金箱はかなりの重さになったため、バッジやチラシを渡す人も含めて、最低でも1会場に20人は必要となる。



14会場のほとんどには、全国協議会加盟の団体があったが、倉敷（岡山）と広島の2会場にはボランティア団体はあるものの、全国協議会に加盟していない。それでも協力してくれることになった。

こうして9月4日のよこすか芸術劇場を皮切りに、ｈｉｄｅのソロツアーが始まった。

真由子さんの経過は順調そのもので、実は直前の2日に退院を果たしていた。危篤状態に陥って5カ月ぶりだ。

退院が9月2日と決まって、真由子さんが大喜びしたのは言うまでもないが、それは「病院を出られる」といった単純なものではない。ｈｉｄｅのセカンドアルバム『ＰＳＹＥＮＣＥ』が発売される日なのだ。

退院の日程は医師が決めるものだから、真由子さんや和子さんの自由になるわけではない。だから、偶然の一致なのだが、それが真由子さんにはたまらなくうれしい。

ｈｉｄｅがあらかじめ、自分のために退院祝いを考えてくれているように思えたのである。

ｈｉｄｅのツアーは退院から2日後だったが、真由子さんが参加しないはずがない。病院も真由子さんがそうすることを見越していたのだろう、加藤助教授はやんわりと釘を刺していた。

「コンサートのような人混みに入ると、感染症にかかりやすいから、行くことは認められませんよ」

しかし、大きなマスクをして和子さんと初日の横須賀へ出かけた。さすがにコンサート会場に入るのは怖い。感染症を侮ってはいけないのだ。そこで、楽屋のモニターを見つめていたが、最後の

1曲だけｈｉｄｅの両親と同じ席に座った。
コンサートが終了し、再び楽屋へ戻ったらｈｉｄｅがやって来た。
「よく来たなあ」
ｈｉｄｅはいきなり真由子さんを抱きしめた。
「よく来た。本当によく来た」
真由子さんを抱きしめながら、ｈｉｄｅが涙を流している。電話では話をしていたものの、真由子さんに会うのは危篤のときに病院へ駆けつけた4月以来5カ月ぶりなのだ。大きなマスク姿だが、元気になって目の前にいる真由子さんが妹そのものに見えたのであろう。
数分はそのままの姿だった。和子さんは、まるで映画のワンシーンを見ているようで、もらい泣きしていた。
「よし、みんなのところへ行こう」
ｈｉｄｅは真由子さんを背負って、メンバーの楽屋を訪ね歩いた。
一方、ボランティアたちは開演前の募金活動で度肝を抜かれていた。
「これが、かのコスプレか。話には聞いてたけど……」
聞いてはいたが、これほど間近で、しかも大量のコスプレイヤーに接するのは初めてのボランティアばかりだ。何しろライオンズ日本財団は、会員の多くが事業主だから当然のように「オジサン」ばかりだし、骨髄バンクボランティアも若い人がいないわけではないが、やはりオジサンやオバサンが多数を占める。
髪の毛を染めたり、逆立てたりしている姿は大したことがない。着ぐるみや派手派手の衣装、そして歌舞伎役者と見まごう化粧を眺めていると、圧倒されそうなのだ。それでも、せっかく募金活動ができるのだから、寄付を呼びかけなければならない。
頭が半ば混乱しながら、時間がたつにつれ、ボランティアはファンたちにひとつの特徴があることに気づいた。
「ご苦労さま」
「ありがとう」
「ｈｉｄｅも頑張ってるんだよね」
「おじさんやおばさんたちも、頑張ってね」
募金箱の前で財布を広げ、硬貨や紙幣を取り出しては入れていく。ｈｉｄｅデザインのバッジを受け取るときに、彼女らの多くが頭を下げるのだ。
ｈｉｄｅが骨髄バンクにドナー登録したことは、みんな知っている。いちいち説明しなくてもいいのである。
「みんな、あったかいなあ」
開演時間となって、ファンの姿が消えたよこすか芸術劇場の正面で、ボランティアたちは初めての驚きと感激に戸惑いながら、こんな感想を交わし合っていた。開演後しばらくして、会場の片隅

でコンサートを聴くことができたのも、ボランティアたちの記憶にしっかり刻むための助けになった。ｈｉｄｅに会ったあと、真由子さんと和子さんはボランティアの控え室に足を運んだ。

全国でトップのコンサートだけに、寄付金額が気になるところだったが、会場の定員が１８００人と少なかったせいか、およそ20万円だった。しかし、通常の街頭ではどんなに声をからしても、こんなに高額の募金が集まることはない。

次は9月8日で、1万２０００人もが集まった千葉マリンスタジアムだったから、募金はなんと90万円を超えてしまった。このときはＬＥＭＯＮｅｄイベントとしてのコンサートで、ｈｉｄｅが真由子さんに言っていたものだ。

「これは、真由子のために開くお祭りなんだよ」

その気持ちが、言葉には出なくてもファンたちに伝わったのかもしれない。

3会場目の福岡サンパレスでｈｉｄｅと対面したのが、福岡県大野城市の籾井隆司さんだ。ボランティアがお膳立てしてくれた。コンサートが始まる前に控え室で、母の愛子さんとともにｈｉｄｅと会った。

「元気じゃん」

ｈｉｄｅは隆司さんの顔を見るなりそう言った。

「ハイ、元気です」

屈託なくそう答えた隆司さんはそのころ18歳で、髪を染めていたから確かに元気そうに見える。



だが、生後6カ月のとき免疫不全症と診断され、何度も死線を越えてきた。抵抗力があまりないので感染症にかかりやすく、入退院をずっと繰り返してきたのだ。病気自体は骨髄移植の対象だから、骨髄バンクに登録したもののドナーはずっとあらわれていない。

「何かやってんの？」

「ギターを少々」

中学から高校にかけて、少し弾いていた。ＸＪＡＰＡＮには魅力を感じないのだが、ｈｉｄｅには惹かれてきた。コンサートを聴いてますますハマりこんでいく自分を感じるが、ｈｉｄｅが亡くなっても大きな変化はない。

「自由に生きること」

これが、もっかの人生訓だが、闘病仲間を数多く見送ってきた隆司さんには、どこか虚無的なところが見える。

「病気には負ける気がしないですよ。絶対に負けん」

自分の店を持ってバーテンダーになるのが夢という隆司さんは、最後にこう言った。

「夢は、ないよりはあるほうがいい」

以後、コンサートは松山、大阪、名古屋、倉敷、広島、金沢、札幌、新潟、静岡、仙台……と、つづく。

どの会場でも、募金活動に参加したボランティアの印象は一致していた。その共通項をひとこと

であらわすと、こうなる。

「人は、外見で判断してはいけない。姿かたちがどうあろうと、心がとっても豊かで明るくて、あったかい人たちが、こんなにも集まっているんだ。ｈｉｄｅの人柄がそのままあらわされているんじゃないだろうか」

金沢のコンサートで募金に立った福井市の井上直子さんは、こう感じた。

「ファンたちに出会ったとき、正直言って私はびっくりしました。『一体この子たちは、どこで着替えてこのいでたちになってあらわれ出てくるのだろう。こりゃニューヨークよりすごいなあ』って思ったものです。けれど、かわいい貯金箱にせっせと貯めたお金を箱ごと寄付していくたくさんのファンや、『頑張ってね』と言ってくれるファンに『今どきの若いモンは……』なんていうせりふを言うような年の取り方だけはしたくないなあ、いつも青春の心、柔軟なハートを持って時代に取り残されないようにしたいなあ、とつくづく思ったものでした」

夫の仕事の都合でニューヨークに住んだ経験もある井上さんの印象は、驚きから次のように変わるところが面白い。

「ファンたちが手にしているドラえもんの風船やかわいいぬいぐるみを見ても、熱烈ファンだけにしかわからない秘密の暗号に思えて、この子たちほんとに、今の社会に目も耳もふさぎたいくらいいろいろ不安を抱えているけど、純粋で優しいんだろうな、あんな大人になりたくないんだろうな、こんな日本社会の現実を見たら、ついつい心を閉ざしてピュアなものを求めたくなると、オバサンでも思うものねって、とても複雑な思いでファンと一緒に少しだけコンサート会場で踊っていました」

最終会場は、10月19日と20日の東京・国立代々木第一体育館だった。ここは６０００人が入れるが、競技場の周りは広大な広場となっている。

「命を救うボランティア　骨髄バンク」

募金箱を持ったボランティアは、こんな文字が書かれたノボリを一緒に掲げていたが、それを目指して中年の男がやってくる。緑色の募金箱に１００円硬貨を入れてはｈｉｄｅデザインのバッジを受け取っていく。それが何度も繰り返される。

妙だなと思ったボランティアが、男の去っていく先を見つめていたら、コスプレのファンたちに紙切れを見せて何かしゃべっている。ダフ屋だったのだ。最後のコンサートのせいか、チケットを持っていないファンも結構いた。ほかのダフ屋との〝差別化〟を図るために、その男はバッジを景品代わりにしていたのである。バッジを売りつけているわけではないから、ボランティアは特に目クジラを立てるほどでもないと思った。

ここでも、ファンたちの行動はオバサンをうならせた。東京・江東区の村上順子さんが語る。

「原宿の駅を降りた途端、私は『目がテン』状態になりました。駅前の歩道は形容しがたいメークや、派手な衣装をまとったコスプレの若者たちであふれ返っていたからです。会場の前の広場に吸

い込まれていく光景は、まるでミュージカルの舞台を見ているようで、率直なところ不気味でした。あちこちでエールの交換がおこなわれ、互いに隈取りメークをしあう姿には、怖ささえ覚えたほどです」

その第一印象は、募金箱を両手に抱えてから、一変するのである。

「まっすぐに見つめてくる瞳はとっても優しくて、純粋な喜びに満ちていました。それだけでなく、彼女らが発する言葉は、どれも優しくて温かさが感じられるものばかりでした。今まで、街頭で骨髄バンクの広報や募金活動をしていて、ときに口汚くののしられたり、完全無視されたりといった経験をしてきた私には、思いがけない喜びをもたらせたものです」

それが、さらにうれしい驚きの経験までさせられることになる。

「開場を知らせるアナウンスが流れると、あちこちで彼女らは言葉を交わし合いました。『ｈｉｄｅちゃんやメンバーに迷惑かけちゃダメだよ』って、広場に散らばっているゴミ集めが始まったのです。これには本当に衝撃を受けました。心は喜びに震えたのです。今まで、外面で人を判断することの多かった自分に気づかされ、大いに反省させられたものです。彼らとの出会いは、私に素直な感情を呼び起こさせ、柔軟な心を与えてくれました」

最終日の20日にも同じような光景が繰り広げられたが、ボランティアは改めてびっくりさせられた。ソロツアー最後ということもあり、コンサートが終わってからも会場の外で募金することが認められたのだが、なんとファンたちが募金箱に殺到したのである。



「すみませーん、一列に並んでくださーい！」

募金者が行列をつくるなど、まさに前代未聞の出来事だったのだ。

そんなボランティアたちに、差し入れのシュークリームとエクレアを持ってあらわれたｈｉｄｅファンがいる。東京・大田区の鎌田綾子さんだ。

中学2年生のころから少しずつＸ　ＪＡＰＡＮにハマるようになっていた。やがて、自分のファンであっても他人に迷惑をかけるようなことには「いけない」と諭す厳しさを持つｈｉｄｅに惹かれ始めたという。真由子さんがｈｉｄｅと対面したテレビを見たときは「ずるいなあ」と思った。

「だって、病気だからって、なんでひとりの女の子にしか会わないのかなあ、病気の子ってほかにもいるだろうに、って感じだったんです。でも、少しずつ考え方が変わっていきました。ｈｉｄｅさんは真剣にやってたし、『一緒に頑張ろうな』って言ってるのを聞いてからですね。会ったことはありませんが、真由子さんもとても強い子に見えます。私だったら、死んじゃいたいって思うかもしれないのに、小さな体で頑張っているんですから、『あ、真由子さんを応援したいなあ』と思ってから、テレビを見て最初に感じたことがとても恥ずかしくなりました」

鎌田さんはそれだけにとどまらなかった。

「私なりに応援するためには、自分でできることから始めよう、それには骨髄バンクだろうな」

そこで、全国協議会に手紙を出した。骨髄バンクってどんなところ？　ドナーになるって痛くないの？　もし失敗したらどうなるの？　わからないことだらけだったからだ。事務局次長を務めて

いた山本順子さんが返事を書いたことから、ｈｉｄｅのコンサート会場に行けば山本さんに会えると思って、併せて差し入れを持っていったのだ。

その後、ＧＬＡＹの全国コンサートでも募金活動を実施したが、鎌田さんはそのときはボランティアのひとりとして活動し、また97年1月に日本の骨髄バンクでの移植が１０００例を突破したときのキャンペーンにも参加した。

ｈｉｄｅの死を知ったとき、鎌田さんはパニックに陥った。

「最初は『自殺』と聞きましたから、真由ちゃんに生きることの大切さを教えたのがｈｉｄｅちゃんなのに、死んじゃうなんて裏切り者だ、いったい真由ちゃんをどうしてくれるんだって思ったんです。もう死ぬことしか考えませんでしたね」

やがて、ｈｉｄｅは事故死だという見方が流れ始めた。

「そうだ、自殺なんかするわけがない。だったら、ここで自殺してｈｉｄｅさんに会いに行っても、きっと怒られるだろうな。真由ちゃんだって頑張ろうって思ってるだろうし、ここで死んだら弱い人間で、ｈｉｄｅさんが教えてくれたことが全く役に立ってないことになっちゃうじゃないか」

友人たちからも、こう引きとめられた。

「『なんで死んだんだよ』って、あなたは思ってるよね。でも、あなたが死んだら、私もあなたのことそう思うよ。みんながそうやって死んじゃったら、ｈｉｄｅさんのやってきたことをだれも継げなくなるじゃないの。骨髄バンクのこととかやってたんだから、それをつづけなさいよ」



ようやく自分を取り戻してからは、「ここで逃げるわけにはいかない」と、強く生きる決意を固めた。

96年秋の全20回のソロツアーには、延べ６万１７００人の入場者があり、募金総額は６７０万円近くに達した。